

「ことばの教室」における側音化構音指導の一試み

—自作の「唱えて覚える発音練習プリント」を活用した視覚的・聴覚的アプローチを通して—

大衡村立大衡小学校
教諭 津島 弘子

I はじめに(発端)

「ことばの教室」発祥の地は宮城県仙台市である。全国で初めて仙台市立通町小学校にことばの教室が開設されたのが昭和33年、それから今年で65年になる。開設者の濱崎健治先生(以下濱崎先生)から受け継がれた系統的な構音指導の方法は、「ことばの教室」担当者に広く受け継がれてきた。

濱崎先生の著した『正しい構音と発音 臨床音声学の理論と実際』は、1989年の初版発行から34年経った今も、いつでも紐解けるように私の手元に置いてある。「ことばの教室」を担当したばかりの頃は難しく読み解けない箇所が多くあったが、経験を重ねて今改めて読み直すと、「音声・聴覚器官」・「脳神経」・「ことばの発達」・「音声学」など構音指導に必要な知識が網羅された、まさにバイブルと呼ぶべき書籍だということに改めて感嘆させられる。濱崎先生没後30年の2019年には、復刻版が発行され、濱崎先生の長女である川嶋洋子さんから県内全ての「ことばの教室」設置校に献呈された。このようなすばらしい功績を残した先生が、宮城県の出身であることを誇りに思う。

退職を目前にした今、濱崎先生が遺した貴重な構音指導の技術を次の世代の担当者に伝える責務が私にはある、そう考えるようになった。「ことばの教室」担当(以下担当)としてすべきことはもちろん構音指導だけではない。しかしながら、構音指導は、担当が最初に身に付けるべき必須の技術である。これから述べる「唱えて覚える発音練習プリント」が、構音指導の方法を習得するための一助になってくれればうれしい。

II 研究の目標

自作の「唱えて覚える発音練習プリント」を活用し、練習の要点を視覚的・聴覚的にアプローチすることによって効率的な側音化構音指導の方法を探る。

III 研究の計画

- 1 対象 〇小学校「ことばの教室」通級児童 24名
- 2 期間 令和3年6月1日～令和5年9月29日

IV 経緯

「家庭でも練習をしたいので発音練習の方法を教えて欲しい。」三年程前、保護者からこのような要望があった。コロナ禍で学習内容が制限されただけでなく、休校などで十分な指導時間が確保できない状況が続いていた頃のことである。担当が思っていたように、保護者も発音練習の時間を十分に取れていないことを危惧していたようだ。そこで一人一人の課題音と練習レベルに合わせた「ことばの練習プリント」を作成し、家庭学習の際に活用してもらったところ、予想以上の効果があった。

「ことばの練習プリント」は、授業でも主要な教材として使える質の高い内容にし、同じものを家庭学習としても使用した。いつも使っているプリントなら、担当がいなくても「ことばの教室」と同質の練習ができるに違いないと考えたからである。そうして「ことばの練習プリント」の使用を続けていくうちに、練習の要点をリズムカルに唱えられるようにしたら掛け算九九のように覚えやすくなるのではないかと考えるようになった。そこで、これまで使ってきた「ことばの練習プリント」に、わかりやすい短い言葉で練習の要点を書き加え、挿絵も添えて、「唱えて覚える発音練習プリント」を作成することにした。

この機会をとらえて、構音指導についてあらためて書籍や資料を読み直して確認した。昭和大学歯科病院 言語聴覚士の山下夕香里氏によれば(以下山下氏)、構音とは、ことばとして使われる音(語音)を作ることである。構音障害

とは、特定の音がかなりの程度習慣的に誤られることであり、構音指導とは、ある程度固定された構音習慣を変える働きかけである。その目的はことばの明瞭度の改善で、最終目標は習得した音を日常会話に定着させることである。

ここでは、構音障害の中でも、自然治癒しにくく改善に時間がかかると言われている「側音化構音」について取り上げる。「側音化構音」は、多くの場合コミュニケーションに支障をきたすほどではないが、構音が全体的に歪んでいるため、大人になって悩む人が少なくない。そのようなことにならないよう、子どもの時に適切な指導が行われることが求められる。本論文では、「側音化構音」の中でも障害音として多くみられる「き」と「り」の「音を作る段階」の基本操作について、これまでの実践から効果のあった練習を厳選し、一つの方法として述べたい。「唱えて覚える発音練習プリント」を日々の授業に活用することで、通級児童の一人一人が課題意識を持って練習に取り組むようになり、より効果的な構音指導が可能になるのではないかと考えた。さらに、「唱えて覚える発音練習プリント」を活用し、この中の方法を試みれば、新担当の先生でも最短の道のりて構音改善に至ることができるとは思えないかと考えた。

「ことばの教室」は、いわばオートクチュールである。構音指導は、その子だけにぴったり合うオーダーメイドの洋服でなければならない。完全にオリジナルな一点物の衣装は、生地や仕立ても含めて最高の完成度を目指したい。しかし、オーダーメイドの洋服にも基本のパターンというものはある。私が考える構音指導の方法を一つのパターンとし、一人一人にぴったり合わせるためのデザインや補正は個々の先生方に委ねたい。

※一般的には「発音」という用語が広く使われているが、言語障害の領域では「構音」が日常的に使われている。本論文でも基本的には「構音」を使用するが、児童や保護者向けとしては「発音」を使用する。

V 実践

I 『基本の練習プリント』

(1) 『舌の名称カード』(図1)

舌の部位を表す用語は医学と音声学で異なるため、同じ部位でも異なる名称を用いることがある。ここでは、「舌尖・前舌・中舌・奥舌・正中線」という名称を用いた。児童に舌の名称を覚えてもらうと構音指導がスムーズに進むため、自作の「舌の名称カード」を常に手元に置き、舌の位置を確認しながら指導を行った。

(2) 『スマイルトレーニング』(図1)

「き」と「り」の母音は「い」である。「い」の口形が整うと「き」と「り」の構音がきれいに仕上がる。最終的な仕上げの段階を見据えて、きれいな「い」の口形を作るための「スマイルトレーニング」を、初期の段階から行うことにした。

(3) 『あいうべ体操』(図1)

側音化構音の指導を行う場合、舌を出した状態で音を出す練習から始める。舌を出した状態の舌を「あいうべの舌」と名付け、定着するまで「あいうべ体操」を毎時間行った。



図1

2 『唱えて覚える発音練習プリント「き」』

『正しい構音と発音 臨床音声学の理論と実際』によれば、か行音の子音「k」は軟口蓋無声破裂音で、構音位置は軟口蓋と奥舌である。奥舌を軟口蓋に密着させて口腔前部と鼻腔への息の通路を閉ざし、呼気の圧力が高まったところで奥舌を急激に下げて軟口蓋での閉鎖を破る。か行音の子音「k」のポイントは奥舌であると言える。

(1) 『口の中に水をためる』(図2)

どの児童でも必ずできる「き」の練習として、ステップ(1)は「口の中に水をためる」とした。水を口の中に含んで口を閉じ、そのまま保持するという練習である。水を含んで口を閉じるだけであればほとんどの児童ができる。ただし、口から水が漏れないように唇をしっかりと閉じることがポイントである。

(2) 『口の中に水をためて上を向く』(図2)

ステップ(2)は「口の中に水をためて上を向く」にした。口に水を含んだまま上を向く場合、どの程度首を傾げるべきか迷った。実際に自分で試したところ、首を少々傾けたくらいでは奥舌を挙上しなくても口の中に水をためられることがわかった。目的は奥舌の挙上なので、視点を天井に向けるよう具体的に指示することにした。

(3) 『口の中に水をためて上を向き、口を開ける』(図2)

「ステップ(3)」では、口を開けるという動作を加えた。口を開けたまま口の中の水を保持するには、必然的に上を向いて奥舌をきちんと閉鎖させる必要がある。奥舌挙上の動作が、このときに強く意識される。コロナ禍で実施できなかった「うがい」を久しぶりに行ってみると、できない児童があまりにも多いことに驚いた。口を開けて水をためる動作をするだけで、むせたりすぐに水を吐き出してしまったりする児童もいた。「か行音」全てが正しく言えない児童だけでなく、側音化構音「き」「け」の練習を行っている児童も同様にできなかった。コロナ禍で数年の間、「うがい」の練習を行ってこなかったが、やはり濱崎先生の時代から「ことばの教室」の指導に取り入れられてきた「うがい」の練習は、「か行音」の構音を導くために有効な手段であるとあらためて思う。

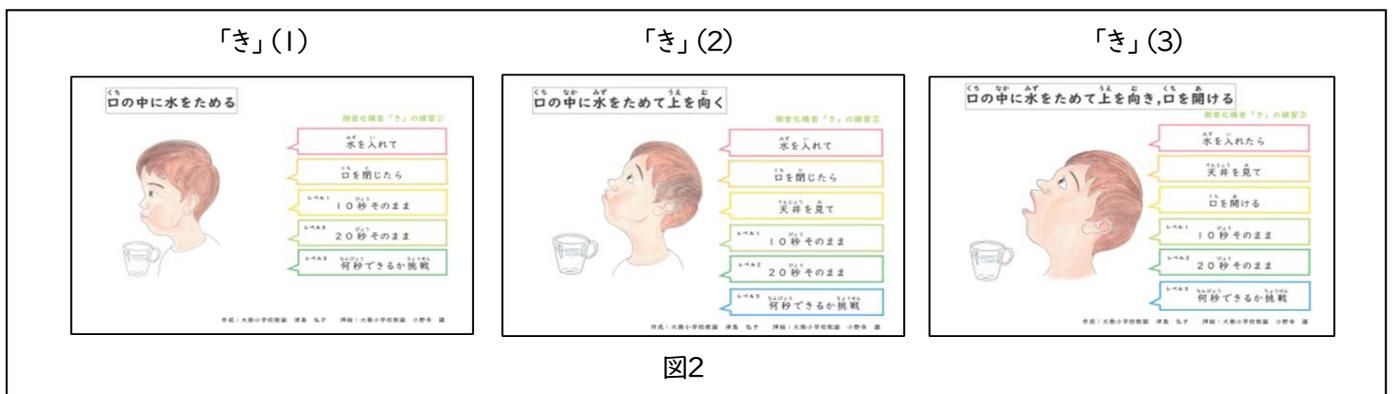


図2

(4) 『口の中に水をため、上を向いて「がー』(図3)

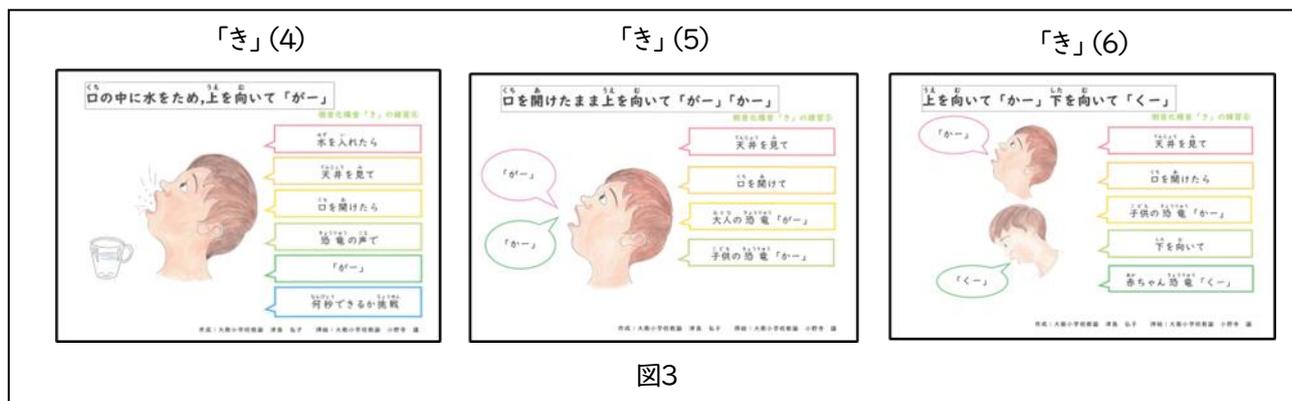
「ステップ(3)」が30秒以上続けてできるようになったら、有声うがいの練習に移行する。「うがいをして。」と言うと、どうしても普段行っている無声うがいになりがちである。そこで、あえて「うがい」という言葉は使わずに、「大人の恐竜の声を出して。」と言って、有声うがいを導いた。怪獣の声と恐竜の声でどちらにするか迷ったが、児童に聞いてみると恐竜の方が馴染みがあるということがわかったので、恐竜にした。「うがい」の音が小さすぎるときには、「まだ大人の恐竜になっていないね。もっと凶暴な恐竜の声にして。」と話して、「がー」と有声でうがいができるようにアドバイスをした。レベルは①「10秒そのまま」②「20秒そのまま」③「何秒できるか挑戦」の三段階とした。児童に好きなレベルを選ばせるようにすると、練習を始めたばかりのときには①のレベルを、自信がついてくると③のレベルを選んで記録に挑戦するようになった。

(5) 『口を開けたまま上を向いて「がー」「かー』(図3)

有声うかがいができるようになったら、水なしで「が」「か」を構音する練習を行った。最初は「ないしょ話」(無声音)で、できるようになったら、「ふつうの声」(有声音)で練習した。これまで「ささやき声」と表現していたが、山下氏が講義の中で使用していた「ないしょ話」という表現がぴったりだと思われたので、「ないしょ話」を採用させていただいた。本当はすぐに「か行音」の子音「k」を導きたいところではあるが、「k」の音にスムーズに移行するために、「がー」を大人の恐竜、「かー」を子どもの恐竜、「くー」(「k」)を赤ちゃん恐竜の声とした。児童と一緒に恐竜の声でことばを交わしつつ、楽しみながら「k」の音が習得できた。

(6) 『上を向いて「かー」下を向いて「くー』(図3)

子音をよりはっきり、正しく出せるように遊び感覚で楽しみながら繰り返し繰り返し練習を行うことができた。遊び感覚で行えたので、何度繰り返しても児童から「もうやめたい」と言われることはなかった。楽しいと感じられる要素があれば、単調な練習でも難なく繰り返すことができるものなのだ実感した。大人の恐竜の声「がー」ができるようになったら、子どもの恐竜の声「かー」は上を向いて言い、「くー」は下を向いて言わせた。上向きのほうが奥舌の挙上は楽にできるが、最終的には正面を向いて「k」の音が言えるようにしなければならない。首の傾きを変えながら練習することで、どの子もすんなりと「k」の音を出せるようになった。



(7) 『ないしょ話で「いー」「くー』(図4)

「k」の音が出せるようになったら、母音と子音をつなげるために「i」と「k」を続けて言う練習を行う。「き」の構音につなげるための「k」なので、「い」の口形で構音させることがポイントになる。担当の後について「ないしょ話」で繰り返し言わせながら少しずつスピードを上げていく。担当のほうで速さをコントロールしながら児童がスピードに乗ってきたところで、「i-k-」から「kui-」に変換する。

(8) 『声に出して「いー」「くー』(図4)

「ないしょ話」で「kui-」が言えるようになったら、母音「i」をはっきりと声に出して「i」と「k」を続けて言う練習を行う。(7)と同様に「kui-」を導いていく。「kui-」の音が出せるようになったら、以下の4つの方法で舌の脱力を確認しながら練習を行う。

(9)ー1 『「くー」(丸めて広げて)』(図4)

一つ目の方法は、「舌じゃんけんのチョコキ」を作ってから構音する方法である。「舌じゃんけんのチョコキ」は中舌に力が入っていると作ることができない。手袋を着けて人差し指を舌の中央に当て、のり巻きを作る要領で指を舌でくるむと、多くの児童は中舌の力を抜く感覚がつかめるようになった。お菓子を使う事が可能であれば、細めのかりんとうやチョコレートがけのフィンガービスケットなどを使うのも効果的である。お菓子で正中線に線を描き、凹ませる部分を意識させてから舌でくるむ練習をすると、「舌じゃんけんのチョコキ」がよりスムーズにできるようになる。「舌じゃんけんのチョコキ」を作った状態から舌を広げ、舌の真ん中にくぼみを作り、上歯の下に影ができるようにして構音する。「舌じゃんけんのチョコキ」の状態の子音の「k」を構音し、舌を開きながら平舌を作って「i」を構音する。

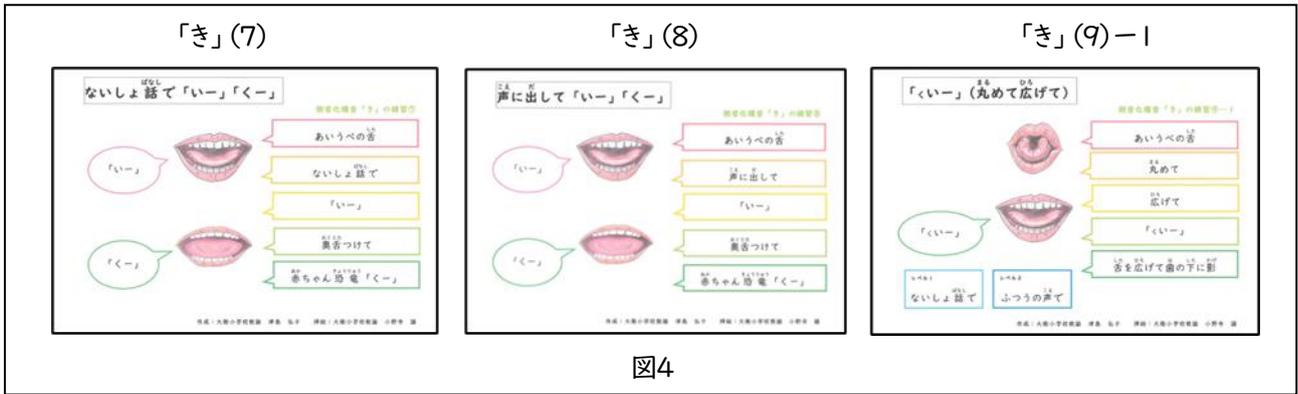


図4

(9)-2 『「くいー」(スティック横に)』(図5)

脱力した平舌(「あいうべの舌」)の中舌部分にスティックを横に当て、広げた舌のままで中央部分にくぼみを作り、上歯の下に影ができるようにする。また、時々顎を上げてペンライトで口の中を照らし、舌の奥までくぼみができていることを確認した。その際、広げた舌を作り、舌の脱力を促すためにスティックを使用した。スティックの使用法は「横に」「縦に」「立てて」の3種類とした。始めは中舌にスティックを横に載せたままで練習する。それができるようになったら、中舌から前舌に向かって舌をなでるようにスティックを移動しながら構音する。スティックで舌をなでたときに、舌がぶるんと震える感覚をつかませたい。

(9)-3 『「くいー」(スティック縦に)』(図5)

スティックを3センチほど口の中に入れ、正中線の上に載せる。舌の脱力を確認し、その状態で「くいー」を構音させる。それができるようになったら、舌の中央部に当てたスティックで舌をなでてスティックを離し、スティックを離れたときに舌がぶるんと震える感覚をつかませたい。

(9)-4 『「くいー」(スティック立てて)』(図5)

四つ目の方法はスティックを立てて中舌に載せる方法である。スティックの幅が1cmほどあるので、立てるとちょうど「き」の口の開きと同じくらいになる。また、スティックを立てることで正中線を意識するようになり、舌の真ん中から息を出す感覚をつかませるのに役立った。4つの練習方法の中でどれが一番やりやすいかと児童に聞いたところ、ほとんどの児童が『(9)-1丸めて広げて』の練習を選んだ。『(9)-1丸めて広げて』の練習は、特に効果のある練習方法だと言える。4つの方法の全てで「くいー」の構音ができるようになったら、次の練習に移る。

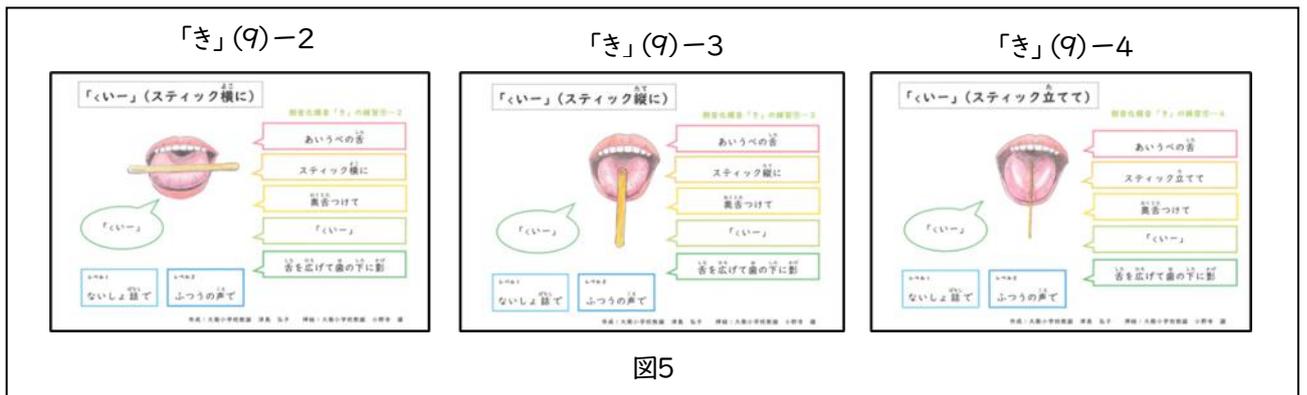


図5

(10) 『「か・か・くいー」』(図6)

奥舌を付けることを意識させるための練習である。ペンライトで「か」の構音時に奥舌が軟口蓋についていることを確認し、同じ場所に付けるつもりで「くいー」を構音する練習を行った。厳密に言えば「くいー」の構音位置(舌を付ける場所)は「か」よりも少し前方なのだが、できるだけ舌の奥の部分をつけるように意識させることで、中舌が盛り上がらないように誘導することができるように思う。

(11) 『「くいー」(スティックなしで)』(図6)

「か・か・くいー」が正しくスムーズに構音できるようになったら、心の中で「か・か」と言っているつもりで奥舌を意識させ、「くいー」の構音を導いた。ここまでできるようになったら、「くい」の無意味音節練習(2音節から5音節まで)を行う。無意味音節練習がスムーズにできるようになったらところで「き」の練習に入る。

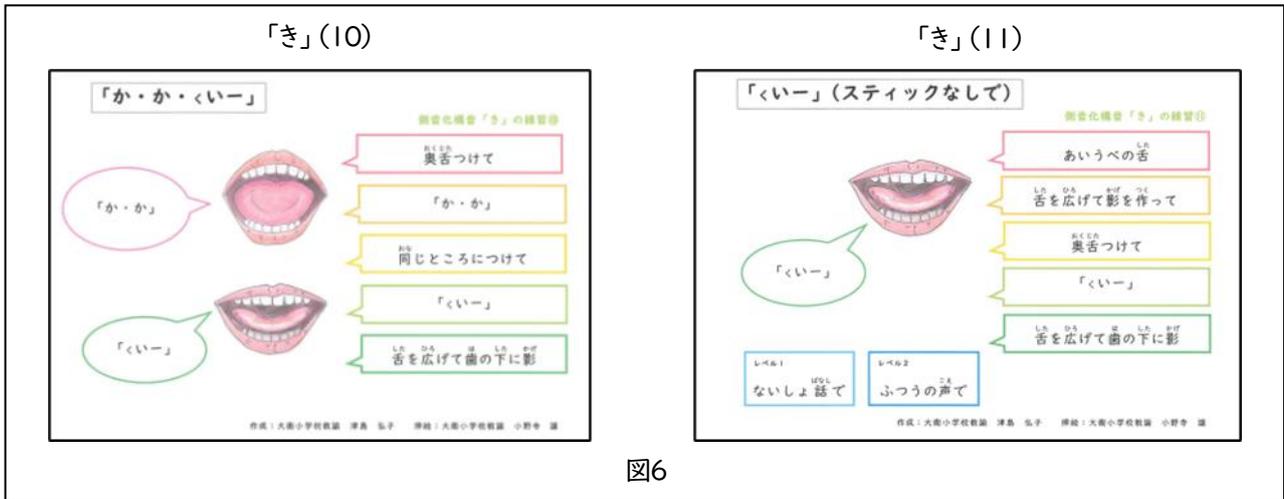


図6

- (12)ー1 『「きー」(丸めて広げて)』 (図7)
- (12)ー2 『「きー」(スティック横に)』 (図7)
- (12)ー3 『「きー」(スティック縦に)』 (図7)
- (12)ー4 『「きー」(スティック立てて)』 (図7)
- (13) 『「か・か・きー」』 (図7)
- (14) 『「きー」(スティックなしで)』 (図7)

『(12)ー1』から『(14)』までは、『(9)ー1』から『(11)』までの方法に倣って「きー」の音を練習させた。「くい」の練習と同様に「き」の練習においても、ほとんどの児童がスムーズにステップを進めていたようである。しかし、(11)『「くいー」(スティックなしで)』から(12)ー1『「きー」(丸めて広げて)』に移るときに、再び中舌に力が入ってしまう児童がいたので、この部分のステップはさらに細分化する必要がある。

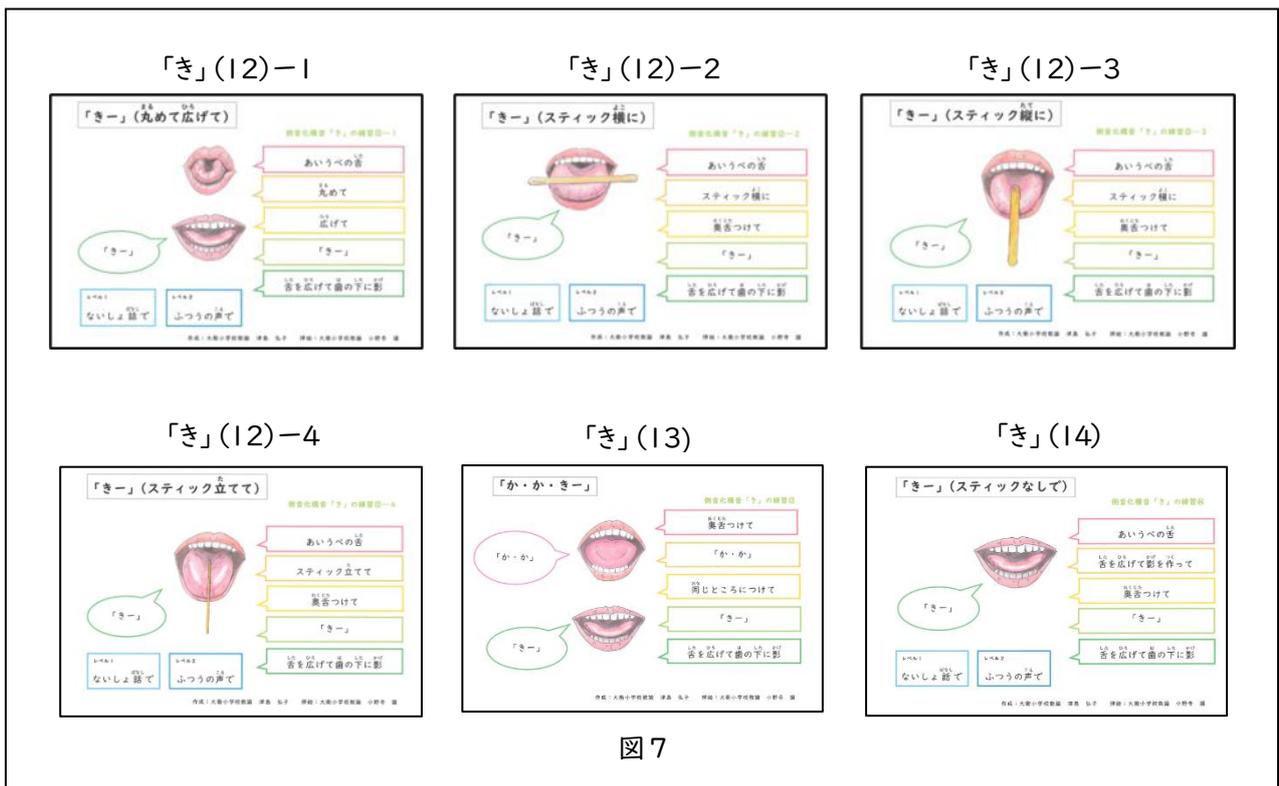


図7

(15) 『「きー」(舌先歯ぐき)』(図8)

「き」(15)

図8

『「きー」(舌先歯ぐき)』が「き」の完成形になる。

- ①舌先歯ぐき…舌先を下歯茎に付けて
- ②スマイル…スマイルの口形で
- ③上の歯下の歯しっかり見せて…上下歯を8本見せて
- ④影を作って…上歯の下に影を作って
- ⑤奥舌つけて…奥舌を軟口蓋に付けて
- ⑥「きー」…「きー」と構音する

これらのポイントが全てできれば正しい「き」の音になる。

3 『唱えて覚える発音練習プリント「リ」』

『正しい構音と発音 臨床音声学の理論と実際』によれば、「ら行」の子音「r」は中歯茎弾音で、構音位置は中歯茎と舌先である。舌先を硬口蓋の方へ反り上げておいて声帯を振動させ、音が出始めてから舌先を中歯茎に一度打ち付け、打った舌先は勢いよく下へ降る。「ら行」の子音「r」のポイントは舌先であると言える。

(1) —1 『舌先つけて10(くちびる)』(図9)

「舌先を唇に付ける」という、舌の機能に問題がなければ必ずできることをステップ(1)にもってきた。どの子にもできる喜びと達成感を味わわせたいと考えたからである。それによりこれから継続して行っていく練習へのモチベーションを高めたいと考えた。

(1) —2 『舌先つけて10(上の歯)』(図9)

上唇に付けた舌先を、次は上歯に付けさせる。1センチほどの移動なので、どの児童も舌先を上歯に付けることはできると考えた。しかし、付けたときに舌の裏が見えること、舌先が静止していることはしっかり確認させたい。

(1) —3 『舌先つけて10(歯ぐき)』(図9)

「舌先を中歯茎に付ける。」ここは少々ハードルが高くなる。ミルクせんべい片を付けたり、スティックで触れたりして「リ」の構音位置を示し、ピンポイントで舌先を付けさせる。ここでは、中歯茎に付けた舌先が静止し、舌の裏側にある舌小帯がまっすぐになっていることを確認する。

「リ」(1)—1

「リ」(1)—2

「リ」(1)—3

図9

(2) —1 『つけておろして (くちびる)』 (図10)

上唇に付けた舌を下唇の上におろして、上歯が8本見えるようにする。口形を整え、上歯を8本見せるというところが「り」の理想的な口形につながる。上歯の下に影を作るためには中舌の力が抜けていなければならない。舌を広げること、上歯を8本見せること、正中線がまっすぐ見えること、中舌に力を入れないこと、この4つがポイントになる。舌が広がらない場合は、スティックなどで補助をする。力の抜けた平らな舌を保持できるようにさせたい。

(2) —2 『つけておろして (上の歯)』 (図10)

この場合も 下ろしたときの舌は「あいうべ」の舌である。下唇の上に脱力した舌を軽く載せる。舌を下ろしたときに、一瞬で力が抜け舌が広がり真ん中にくぼみができて、上歯の下に影が見えるようになれば合格である。

(2) —3 『つけておろして (歯ぐき)』 (図10)

ここでは、構音位置の確認をしっかり行いたい。ミルクせんべい片を付けたり、スティックの先で触れたりして構音位置を確認する。示された箇所¹に舌先を付け、舌小帯がまっすぐに伸びていることを確認してから舌を下ろす。下ろした舌が口の中に収まり、舌先が下歯茎にそっと触れるようにしたい。このときも、舌は脱力され、舌の中央部がくぼみ、上歯の下には影ができることを確認したい。

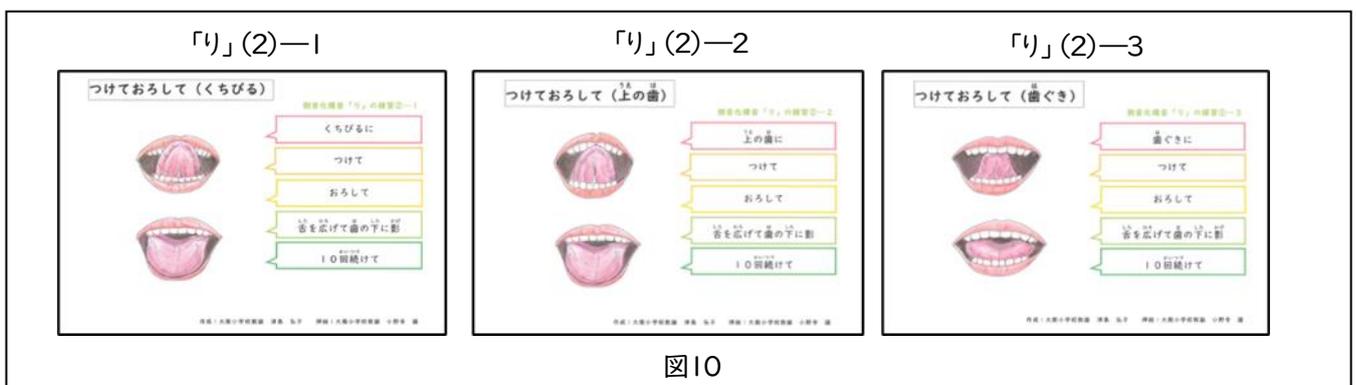


図10

(3) —1 『つけておろしながら「ら・りー」 (くちびる)』 (図11)

ほとんどの場合、側音化構音「り」のある児童は、「り」以外のら行音は正しく構音できる。そこで、「ら」と同様の構音操作で「り」が構音できることを確認したい。上手に構音できる「ら」の後につけて「りー」と言わせることで、舌先を優しく弾いて下ろす動きを意識させる。「レベル1」は「ないしょ話」(無声音)で行い、「レベル2」は「ふつうの声」(有声音)で行う。無声音で構音したほうが舌に余計な力が入りにくく、スムーズに舌を動かすことができる。加えて、子音を意識させやすいという利点もある。まずは無声音で練習を行ない、無声音が完全に習得できたところで、有声音に移ることにした。

(3) —2 『つけておろしながら「ら・りー」 (上の歯)』 (図11)

(3) —1と同様に、「りー」と伸ばしているときに舌は下唇の上に載せた状態である。舌が広がって真ん中の力が抜けてくぼみ、上歯の下に影ができることを確認したい。舌を下唇の上に載せるのは、その方が位置的に下ろしやすいということだけでなく、舌の様子を目で見えてはっきり確認できるからである。

(3) —3 『つけておろしながら「ら・りー」 (歯ぐき)』 (図11)

「ら」を構音した後に同じ場所に舌先を付け、舌小帯がまっすぐに見えることを確認してから「りー」と構音させる。ここでも、(2) —3と同様に舌が脱力されて舌の中央部がくぼみ、上歯の下には影ができることを確認したい。

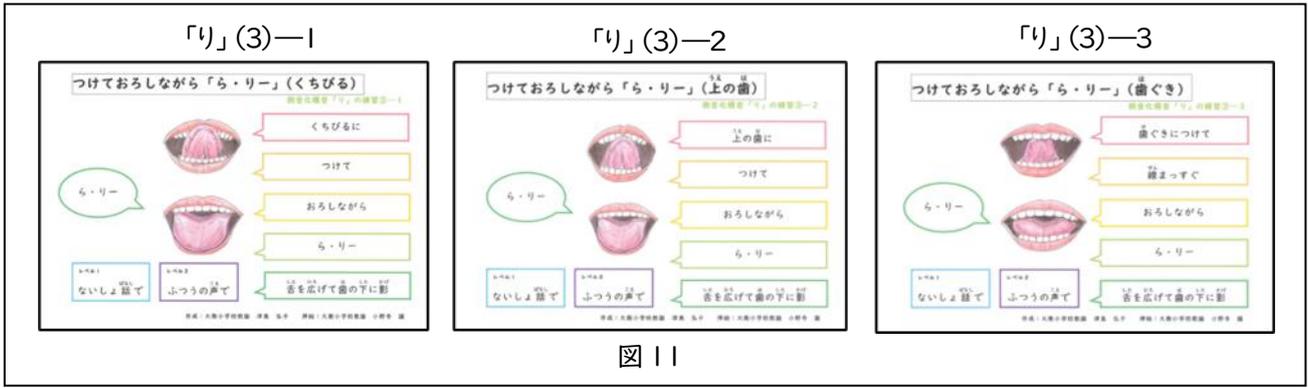


図 11

- (4)―1『つけておろしながら「り・いー」(くちびる)』(図 1 2)
- (4)―2『つけておろしながら「り・いー」(上の歯)』(図 1 2)
- (4)―3『つけておろしながら「り・いー」(歯ぐき)』(図 1 2)
- (5)―1『つけてはじいて「りー」(くちびる)』(図 1 2)
- (5)―2『つけてはじいて「りー」(上の歯)』(図 1 2)
- (5)―3『つけてはじいて「りー」(歯ぐき)』(図 1 3)

『(4)―1』から『(5)―3』までは、『(3)―1』から『(3)―3』までの方法に倣って、『り・いー』『りー』の音を練習させた。(5)―2『つけてはじいて「りー」(上の歯)』から(5)―3『つけてはじいて「りー」(歯ぐき)』に移るときに、舌先をまっすぐ下ろすことができず上歯裏に触れてしまう児童がいたので、この部分のステップはさらに細分化する必要がある。

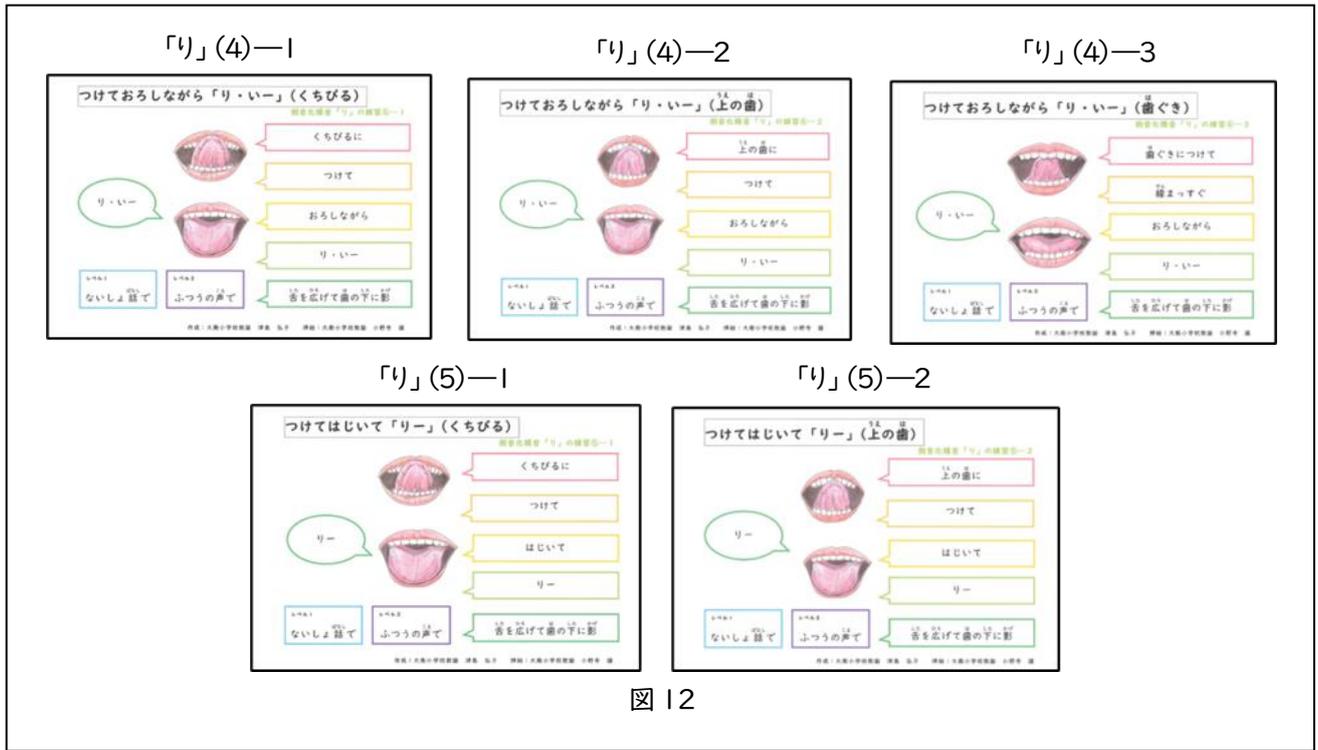


図 12

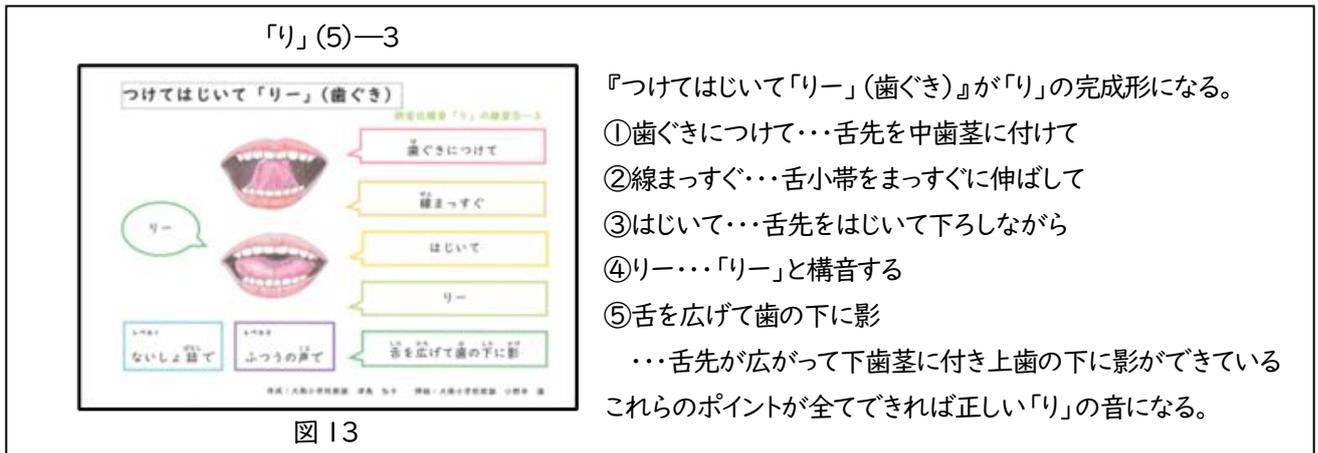


図 13

『つけてはじいて「りー」(歯ぐき)』が「り」の完成形になる。

- ①歯ぐきにつけて…舌先を中歯茎に付けて
- ②線まっすぐ…舌小帯をまっすぐに伸ばして
- ③はじいて…舌先をはじいて下ろしながら
- ④りー…「りー」と構音する
- ⑤舌を広げて歯の下に影

…舌先が広がって下歯茎に付き上歯の下に影ができてこれらのポイントが全てできれば正しい「り」の音になる。

VI 成果と今後の課題

1 成果

- (1) ほぼ全ての児童が、今練習している構音の要点を即座に答えられるようになった。また、撮影した動画で構音の様子を確認する際も、自己評価を正確に行うことができるようになってきた。「唱えて覚える発音練習プリント」で構音練習の要点に聴覚的に意識を向けてきた成果である。
- (2) 練習のコツがつかめてくると、児童はより長くより多く練習するようになった。「唱えて覚える発音練習プリント」で練習の要点を簡潔に示し目標を明確にしたことは、児童の構音練習への意欲を高めるのに効果があった。
- (3) 児童が家庭学習に意欲的に取り組むようになった。「唱えて覚える発音練習プリント」に構音の要点が一目で分かる挿絵を加えたことで、担当がそばにいらなくても構音方法をいつでも視覚的に確認できる環境が整った。
- (4) 「うがいの競争をした」とか「スティックで一緒に練習してみた」など、連絡ノートでことばの練習に触れる保護者が増えてきた。「唱えて覚える発音練習プリント」を使った練習の様子を保護者に参観してもらい、「唱えて覚える発音練習プリント」を長期休暇の課題にしたことは、保護者に対する啓発活動にもなった。

2 今後の課題

- (1) 「き」のプリントでは、(11)『「くいー」(スティックなしで)』から(12)ー1『「きー」(丸めて広げて)』に移る時に、再び中舌に力が入ってしまう児童がいた。また、「り」のプリントでは、(5)ー2『つけてはじいて「りー」(上の歯)』から(5)ー3『つけてはじいて「りー」(歯ぐき)』に移る時に、舌先をまっすぐ下歯茎に下ろすことができず上歯裏に触れてしまう児童がいた。これらの項目はさらに細かく分けて、スムーズに次の段階に進めるよう改善する必要があると思われる。
- (2) 今回、側音化構音「き」と「り」の音について取り上げたが、これ以外の音についてはまだ作成途中である。側音化構音の他の音についても「唱えて覚える発音練習プリント」を作成し、より効率的な指導ができるよう教材を充実させていきたい。
- (3) 「唱えて覚える発音練習プリント」は、まだ私一人の実践にとどまっている。今後は、ほかの担当者にも活用してもらい、より使いやすく改善したりほかの方法を加えたりして、さらに充実した内容にしていきたい。そして、「唱えて覚える発音練習プリント」を、宮城県の「ことばの教室」の共有財産として育てていきたい。一人では実現は難しいかもしれないが、県内の担当者と協力すれば叶う夢かもしれないと、今からわくわくしている。

VII おわりに(次の世代へ)

私に構音指導の方法を教えてくれたのは、紛れもなくこれまでに相逢った「ことばの教室」の通級児童である。練習を重ねる中で、この方法だとうまく言えるとか、このステップはあまりに高すぎて無理だとか、児童の率直な声を聴きながら修正を重ねてきた。その結果得られた今現在の答えが、この「唱えて覚える発音練習プリント」である。構音指導の魅力は、言えなかった言葉が言えるようになり言いたいことが伝わるようになること、それによって児童の可能性が無限に広がることである。このような意義深い仕事に携われたことを幸せに思う。構音指導は、反復練習の連続で即時に成果が現れるものではないが、児童と共に試行と発見を続けていく日々は楽しく、喜びにあふれている。

私の人生を変えた全ての出逢いに感謝しつつ、微力ながら、宮城県の言語障害児教育の発展に私の残りの教員生活を捧げたい。濱崎先生から託されたバトンを、次の世代の先生方に贈るために。

<参考・引用文献>

- 『第56回日本言語障害児教育研究大会資料』 (山下夕香里著 2023)
『わかりやすい側音化構音と口蓋化構音の評価と指導法』 (山下夕香里ほか著 株式会社学苑社 2020)
『正しい構音と発音 臨床音声学の理論と実際』 (濱崎健治著 復刻版 慶應義塾大学出版会株式会社 2019)

<挿絵制作>

大衡村立大衡小学校 教諭 小野寺 譲